

《遺稿》 THE LAST DAYS

— 10000 風

前田陽一

あと、一週間の命？

4月16日(木)

朝食後、床屋へ行く。

昨夜深更、書き上げたナゴヤ・シナリオ*、E*に、荒木、中澤、佐藤の三氏に速達で送るよう頼む。

〔*企画中の名古屋独立騒動を描く喜劇映画〕

〔*E えつ子夫人、以後同じ〕

13時より、日本本年度最初の授業。

まだカリキュラムの内容でよいので、早めに切り上げる。しかし、つい熱が入り、助手の木田さんに「随分のサービスでしたな」と言われる。また、「お疲れのよ

うで、話すのがとてもつらそうだった」とも。

いつも体調など気にしてくれている木田さんならではの言だが、ちよつとシヨック。人にはそう見えないよう気をつけているが、やはり、と。

帰途、かなり疲れているのが、よく判る。

4月17日(金)

13・30 赤坂のアルゴ*の新しく移った事務所へ行く。「新唐獅子*」の主役、赤井英和君と約一時間面談し、演出意図を伝え、赤井君の意見も聞く。

〔*アルゴ 映画製作プロダクション〕

〔*「新唐獅子株式会社」監督としての当面の仕事〕

あと、助監督たちと打合わせ17時ごろまで。

帰り、バインに寄るが、焼酎湯割二杯を飲むのがせいぜい。タクシーで帰る。

4月19日(日)

午前中より、東宝撮影所の中の衣裳会社で衣裳合わせ。Eに車で田畑駅まで送ってもらおうとき、

「だいぶ、目に出てきたわね」と言うので、バックミラーを見てびっくり。

髭そりのときなど気付かなかったのに、はつきり目が黄色。実に嫌である。

赤井英和君 思っていたより派手なヤクザ・ルックを好む。彼は顔が案外柔和なので、その方が雰囲気が出そう。

夕刻まで次々に現れる俳優さんたちの衣裳合わせをつづける。二人ほどに「監督、おやせになりましたね」と言われる。ゴマスリは「すつきりなさいましたね」とも。一般スタッフは異常に気づいていない様子。

夜、前之園と電話。21、22日の両日、東京にくる用事があるので会わないかと。小学校時代からの近所の幼なじみ達だった彼に、むしろに合いたくなつたが、スケジュールの都合で、またの機会に延ばす。会えば、病状が切迫していることを言ってしまったかもしれぬ。

夜、賛育会病院の川越先生、看護婦の吉富さん来てくれる。11日に森谷医院で採血した検査結果を見せる。やはり黄疸の数値が通常よりかなり高いと言われる。黄疸の数値の変化を見るため採血。

私の顔色と、しゃべり方の元気で、あと一ヶ月は来なくて大丈夫だ、と言って帰られたので、とても元気づけられる。

4月18日(土)
朝、ゆっくり起き、ナゴヤ・シナリオを読み返し、チエックする。

18・30 六本木の荒木事務所で、荒木、中澤、佐藤の三人に意見をまく。

まずは大へん面白くてできていると。ただし、荒木さんの意見として、愛知万博の誘致に失敗したという仮定が、名古屋独立の重要なきっかけのひとつになっているのがよくないと、かなり強硬に主張される。他の二君は気にならない。ただ荒木氏の意見はそれをはずした場合の代案がちよつと見つからないし、このままでもよいのではないかと思うのだが。九時ごろまで、内容を検討、意見をまく。そのあと、近くの香妃園で中華料理と紹興酒少々。食欲なし。

4月20日(月)

10:30より衣裳合わせ。午前中は女性主役のつみき・みほ。一緒に仕事するのは三本目である。昨年末、出産をしたので、お祝を言っておく。演出上の意図を伝える。午後も数人の衣裳合わせ。

昼食ぬきだったので、帰り下北沢で下車して、「野田岩」のうなぎを食べる。酒二本。

帰ると、Eから17日の採血の結果が、川越先生からあった。それによれば、なお急上昇していると。(通常人0.2~1.0)のところ、前の6.4から今度は16以上)「あと一週間ですね」と言われたが、その正確な意味をEは怖くて聞き直せなかった、と。

先生の言「気力でもっているだけでしょう」とも。あと一週間! どうしてくれるんだよ!

4月21日(火)

午前3時ごろまで眠れず。

スタッフ車に近くの駒込病院前まで来てもらい、須磨邸*の候補である妹の嫁ぎ先、明王院*の新築の庫裡をスタッフに見せに行く。同所に決定。

〔*須磨邸 ヤクザの親分の邸宅〕

〔*明王院 東京足立の真言宗の古刹 別名赤不動〕

ついでに、小菅刑務所の外を見に行くが、車両制限厳しく撮影は無理と判る。

青山のそば屋で昼食。

その付近のマンション候補を見るが、立派すぎてバツ。下見のロケハンスタッフに、こちらの意図がよく伝っていないのを感じる。

新横浜にとび、廃工場を見る。冒頭のアクションシーンの一候補とするが、まだ、もの足りず。

青物横丁までもどり、寿司屋の表候補を見る。バツ。メイン舞台となる川崎球場の外周と、スタンド下も見る。ぐるりと球場の外側を回るため、ふと貧血を起しそうになるが堪える。

そのあと、子安の唐獅子会社に決まったビールの会社ケンミンの中を観る。

ここは一度断られたが、スタッフに神戸の本社へ直々に電話して、撮影許可の願い書を出せと指示したところ、簡単にOKが出たのである。自分が兵庫県出身であることが幸いした。挨拶した所長は、自分の生家に近い佐用の出身と判った。ロケハン交渉にはねばりが肝要。

夜、横浜橋へ行き、ゲームセンターを見、山下町へ回ってナイトクラブの候補地を見る。いずれもOKを出す。

10000の風

4月22日(水) 晴

午前中は、東京映像学院の入学志望者に話をしに行くことを依頼されていたが、疲れが予想され、南部英夫君に替ってもらうよう頼んでおいた。

数日前、ふと思いついたのだが、このまま何もしないまま仕事をつづけることの不安もあり、前々から関心をもっていたノーベル賞医学者ポリーリング博士の研究によるビタミンCの大量療法を、ダメモトで試してみようと、同博士とアメリカで共同研究していた森重福美医学博士を千葉県大網に訪ねることにする。

この療法はかなり古典的なもので、現在、医学界ではほぼ否定的な評価をされている。ただ森重博士は、遠藤周作の日本の何十人とかの本で名医の一人として紹介されていた記憶があり、そのこととは別に夫婦だけで旅行をしたことなどないことに思い至り、このさい、あまりにもささやかながら、最初で最後になるかも知れぬ日帰りの小旅行を試みようと思ったのである。

タクシーで、有楽町に近い東京駅の外房線ホームに行

今日のスケジュール、目一杯で疲れた。東京まで車で送ってもらい、同行してくれた伊藤プロと自宅近所の寿司屋で、キャストの最終打ち合わせをする。あと一週間などと、スタッフは夢にも思っていない。申し訳ないと思うが、知らせないで、できるだけ、頑張るつもり。

0時ごろ、寝つこうとしたとき、ドン*が妙な声を発してなので、眠れなくなる。やがてR*がEに何か言っている声がする。

〔*前田家の飼犬ドン子。テリア系の雑種〕

〔*R 子息、遼太郎君 高校三年生〕

階下に行くと、Rはドンの体調に異常があるのではないかと心配している。

半年ほど前、同じようなことがあったとき、ドンは間もなく尻より出血し、ベット医院へ連れていったら、肝臓がやられていると診断され、数日入院したことがあるからである。主人の病気につき合う可愛い牝犬なのである。しかし、Eが数日前に、医院へ連れて行って、心配ないと言われたそうで、一段落する。しかし、寝そびれてしまう。

私の心づもりは、特急の指定席に乗り、旅行らしく、車内で駅弁の昼食を食べる、というものであったが、早く着きすぎて、特急発車まで時間がありすぎた。

〔*東京大網間、乗車時間44分 編者調べ〕

その前に快速が一本あるので、リアリストのEは、もつたないから、それで行こうと強く主張する。

結局、そうなってしまったが、まったく夫の心、妻知らず、である。

大網駅前、まずいピラフの昼食を食べ、タクシーで森重医院へ。

医院は、私が二年前まで住んでいた町田市郊外とそっくりな、整然と区画された新興住宅地の中にあり、一般の住宅と変わらぬ一軒であった。

玄関先に先客二人ほどあり、小椅子で待っている。

七十歳を過ぎた白衣の老夫人が出てきて、少し待つように言う。

一人で、医院前の公園に行ってみる。

まだ植わったばかりの樹々の新緑が陽光に映え、広々とした芝生のほとんどは、やわらかそうなクローバーに変じている。

つい、樹蔭のクローバーの上に仰向けに寝てみる。

ひんやりしたクローバーが心地よい。視界は適度に木

洩れ日もらす。枝ばかりとなり、その上に、白雲がゆくり動いている。

そよ風に強弱があつて、「1/fのゆらぎ」という言葉を思い出す。

それは、地上のあらゆる人間に心地よく感じられるもの、そよ風、小鳥のさえずり、せせらぎ、潮騒、平安なときの人間の心拍数、モーツァルトその他の名曲に共通する物理学上の一定のリズムのようなものであり、近年、扇風機の風の間隔、強弱に応用されたりしている。

宇宙創成のとき「無もなき無」が、ふと、ゆらぎ、ピツグ・パンによって膨張し続けているのがこの世界であるという、理科オンチの私ながら、とても気に入っている理論だ。南木佳士の第一〇〇回芥川賞作品の「ダイヤモンド・ダスト」の脚色を依頼されたとき、私のオリジナル部分のモチーフとして、取り入れたことがある。人間、死ねば、その世界に帰っていくと、私は信じるようになっていた。

〔*松竹退社の一八九九年。前田の唯一の純文学シナリオ。

諸事情で映画化ならず〕

最近、河合隼雄の本で知った作者不明のアメリカの詩集「一〇〇〇の風」(南風 椎訳、三五館刊)は、私の子供っぽい死生観にフィットするものがあつた。

私の墓石の前に立って

涙を流さないでください。

私はそこにはいません。

眠ってなんかいません。

私は一〇〇〇の風になって

吹きぬけています。

私はダイアモンドのように

雪の上で輝いています。

私は陽の光になって

熟した穀物の上にふりそそいでいます。

……

と続いていく。この詩には妙なりアリティがあつて、アメリカでは評判になったそうである。

※(ここにシナリオ「ダイヤモンド・ダスト」の終りの方、早春の峠を帰ってくる主人公が、子供に死生観めいたものを語りかける部分を入れる。飛行機雲のあたりから? また、それにプラスして、若くして死んだ妻の宇宙観のいくつかも、入れるとか。)

Eが呼びに来て、医院にもどる。

森重先生は七十代後半だそうだが、実にエネルギーに

あふれた人である。

こちらの病状経過を伝え、近く始まる仕事は、どんなことがあつてもやりたいというのと、

「そうするのがいいでしょう。あと一週間などと考えないことだ」と、おっしゃる。

そして、大きな声で、アメリカの医学界と、日本のそれを述べたて、点数ばかりを気にする日本の健保制度をやっつけ、果ては超有名なK大学病院をヤクザの巣窟と切り捨てる。私が幾多の民間療法の中から、各種の本を讀んで、科学的裏づけも確かそうな「サメの軟骨の微粉末」の効用を喧伝しているアメリカのレイン博士が講演に来日した際、面と向かつて「あなたの説は実証性が不備だ」と齒に衣をさせず直言して、レイン博士の心証をいたく傷つけた話などえんえんとつづく。

先生は、一時郷里の九州で、お兄さんと一緒に病院を経営していたらしいが、「お前と一緒だと病院がつぶれる」と言われ、こちらに来て、独立したとか。

かなり頑固な人らしく、そのため世間的な出世をしそこなつたらしいことが、何となく匂う。しかし、それを悔やんでいる様子もない。

白衣を着た夫人も、かなり面白い人柄で、およそ医者さんの夫人というタイプではない。我々のやりとりを

じつと隣室で耳を済ませているらしく、何度も顔を見せ
て、先生の表現が難しすぎる、とたしなめたり、私とE
を慰めたりする。どうやら看護婦はいない様子で、夫人
が兼ねているらしい。

ようやく先生のあみ出した独自のVCの大量投与を主
体とした話になり、囁んで含めるような丁寧な説明とな
る。

こういう場合、一応は「商売つけ」が出てきたな、と
内心苦笑しながら聞くというのが、私たちのせち辛い習
性だが、そんな風に思うのが、ちよつと恥ずかしくな
るような熱意を感じる。効果のほどはさておき、来てよ
かったと思った。

そして腹部の超音波検査。

ふつうなら、ホスピスに入ってもおかしくないような
病状、と言われる。しかし、まだあきらめてはいけない
と。先生の療法により、患部の縮小もあり得る、と。

私の実感として、医者は、患者に希望めいたものを、
かすかでも残しておく方が好い、と思う。近日はじまる
撮影に取り組み方も湧いたのだ。

一時間の予定が一時間半ほどになり、夫人が兼務する
会計にもおそろしく時間がかかる。夫人もそれが判って
いて、近くにファースト・フードの店があるから、そこ

で一休みして来て下さい、などと言うのも型やぶりだ。
教えられた店に行き、私はフレッシュ・ジュースを、
Eは小さなプリンやアイスクリームの盛り合わせを注
文。Eは半分ずつ残して私にくれる。

医院にもどると、まだ会計が終わっておらず、先生が
次の患者に熱弁をふるっている声が、ガンガン響いてく
る。Eと顔を見合わせ、苦笑をかむす。

二時半に来て、夜七時半にようやく会計が終った。保
険が一部しかきかないので、かなり高額を覚悟していた
が、かなりの安価であった。

駅前で、Eが近くに横断歩道があるのに、無意識に車
の間を抜けようとするので、つい、

「黄痘に気をつけろー」と、どなってしまう。Eには、
そのシャレも通じず。

帰りは、もう特急はなかった。

Eも、森重先生のところへ来てとても良かった、と言
う。東京駅から乗ったタクシーの中で、Eは、多少ほつ
としたのか、「今夜は桑田が先発のはずよ」と浮き浮き
した声でいった。(彼女は大の桑田ファン)
いったいどういう性格をしてるんだろ。

私だけタクシーを途中で下りて、Eの実家に行く。そ
こには前もって連絡しておいたシナリオ・ライターの水

原秀一さんが待っていてくれた。

永原さんは、仲間の同業者数名ではじめた小さなプロ
ダクションの現社長であり、全てを打ち明け、仕事関
係の今後の相談をするため、来てもらったのである。自
宅へ呼ばなかったのは、自宅ではRが来年の大学受験に
備えて勉強中(しているのか、どうか、放任しているの
で判らないが)だからである。

〔*株式会社「ラダス」(ゴミの意とか) 筆者が前社長で現
在は会長〕

相談の内容は、制作のはじまる作品のスタッフに、私
の病状を伝えておくか、どうかであった。結局、プロ
デューサー、カメラマンなど、一、三の口の堅そうな
人にだけ伝え、その場合の処置をお願いしておくとい
うことになった。(病状急変の場合の病院の連絡先、リリ
フ監督など)

しかし、帰宅後、二度永原さんより電話あり、あくま
で私の判断にまかせるが、最後までやりとげる自信を
もって、できれば誰にも言わない方がいいのではないか、
そして秋に予定されている(ナゴヤ・ムービー)をも視
野から消さない方が、と言ってきた。

私もその気持になり、覚悟が決まった。

4月23日(木) 晴

いよいよ戦闘開始。

朝食、雪ひらで炊いた白がゆ、冷や奴、とろろ芋、お
ひたし、でんぶ、梅干、味噌汁。

黄痘の出た目をスタッフにさとられぬよう薄色のつい
た眼鏡をかけて、昔からのしきたりになっている撮影開
始前の安全祈願をする。

赤坂豊川稲荷の境内にスタッフ全員集合。

ふつうの撮影所制作なら、所内の小神社で簡単にすま
せるのだが今回は大げさだ。制作プロダクションが赤坂
にあるせいだ。

七人ほどの僧侶のあげる読経が、鉦、太鼓入りでテン
ポよく、つづら折りの経文帖を何人もが奇術のように斜
めに開いて閉じるパフォーマンスをまじえ、興味ぶか
かった。

午後、池袋のもう一つのスタジオ候補をロケハン。こ
れは決定する。三時ごろ家に帰り、準備中のスタッフか
らの電話に指示を出していく。

4月24日(金) 雨

昨夜は早目にぐっすり眠れたので気持ちがいい。

(撮影日程に入ったため、ここで絶筆)